

小児尿路感染症に関する研究

分担研究者	富山医科薬科大学小児科	小林	収
研究協力者	名古屋市立大学泌尿器科	大田 黒	和 生
	富山医科薬科大学泌尿器科	片 山	喬
	神戸大学小児科	松 尾	保
	独協大学病理	飯 高	和 成
	順天堂大学臨床病理	林	康 之
	国立病院医療センター小児科	山 口	正 司
	国立西埼玉中央病院小児科	原	朋 邦
	県立吉田病院小児科	吉 住	昭
	新潟大学第二内科	木 下	康 民
	国立西札幌病院小児科	門 脇	純 一
	北里大学小児科	酒 井	糾
	兵庫医科大学小児科	和 田	博 義
	済生会川口総合病院小児科	吉 川	俊 夫
	都立清瀬小児病院	伊 藤	拓
	東京女子医大第二病院小児科	森 川	由 紀 子

I. 研究目的

初年度（52年度）は、おもに小児尿路感染症の頻度・臨床症状・ならびに検査・診断法について報告した。

53年度においては、上記の点につきさらに研究をすすめ、また小児・成人尿路感染症の実態について、全国的規模の集計を行ない、その成績につき報告し、かつ尿路感染症の診断基準を設定した。

本年度（54年度）は、統計的観察の集計をさらにすすめ、かつ、従来より報告された成績を基盤として、小児尿路感染症の設定を研究目的とした。

II. 研究成績

本年度報告された研究題目は、尿路感染症の臨床統計・治療成績に関するもの（9題）、新生児尿中赤血球・白血球・細菌に関するもの（5題）、尿中成分に関するもの（5題）、診断に関するもの（4題）、治療基準に関するもの（3題）、尿路奇型と尿路感染に関するもの（3題）、その他が報告された。

まず、新生児尿について検討した成績では、新生児尿中の赤血球数・白血球数の正常値が報告され、日齢0～20日の尿中赤血球数は男女とも1視野4個以内であり、また尿中白血球数は、男11個以内、女13個以内と考えられると報告された、また新生児細菌尿について膀胱穿刺尿、中間尿、バック尿と

表 1 尿路感染症の治療

	起 炎 菌	治 療	一 般 療 法
I. 急性感染症	1. E. coli. 2. Klebsiella. 3. Proteus.	1) 合成ペニシリン剤 2) セファロスポリン剤 3) S-T合剤 起炎菌の同定, 感受性テストの結果薬剤選択 使用期間 2~3週間	1) 薬剤中止後1~2週間は1回は, 尿検査尿培養(2~3箇月間) 2) 水分投与 3) 頻回排尿 4) 尿の酸性化
II. 慢性感染症	1-3のほか 4. Pseudomonas.	1) 合成ペニシリン剤 2) セファロスポリン剤 3) S-T合剤 4) アミノグリコシド剤 使用期間 4) は7~10日間	上記のほか 1) 尿路系のX線検査 2) 外科的処置
III. 再発防止薬		1) ナリジクス酸 2) スルファメチゾール剤 使用期間 3~6箇月間	1) 水分投与 2) 頻回排尿 3) 尿の酸性化

の相関関係をみると、膀胱穿刺尿と中間尿ではきわめて良い相関を示すが、膀胱穿刺尿とバック尿では、相関が得られなかったと報告された。しかし、一方バック尿も、採尿後ただちに培養すれば、かなり良い相関が得られるとの成績も述べられた。

尿中成分についての報告では、尿路感染症における白血球遊走因子について検討した成績では、尿路感染症患児の尿中蛋白には、in Vitro, in Vivo, とも白血球遊走活性が認められ、尿中に、白血球遊走因子が存在することが強く示唆されるとの成績がのべられた。

また、尿路感染症の局所免疫能を検索する目的で、尿中免疫グロブリン濃度について検討した結果、尿中 IgA においては、正常児と尿路感染症児との間に明らかな差が認められたとのべ、今後分泌型 IgA の問題も含めて検討する必要があると報告された。

尿路奇型および尿路異常と、尿路感染症との間に強い相関がみられるが、いずれが原因になっているか不明であり、また下部尿路狭窄に比し、上部尿路狭窄では、尿路感染症の合併が少ないように思われるとの報告、また尿路感染症を上手にコントロールすると、腎・尿路変化が改善してくる例もみられると報告された。

尿路感染症の診断基準に関しては、種々の報告がみられるが、現在まで報告された成績をもとに治療基準を設定した(表1)。

III. まとめ

昭和52年~54年の3年間にわたり、小児尿路感染症に関する研究として、尿路感染症の頻度・臨床症状・起炎菌・検査・診断法につき種々検討を重ねた結果、昨年度は尿路感染症に関する診断基準の設定、さらに本年度は治療基準の設定を行った。

尿路感染症に関しては、いまだ未解決の問題も多く、今後なお研究を加える必要があるものと考えられる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

初年度(52年度)は、おもに小児尿路感染症の頻度・臨床症状・ならびに検査・診断法について報告した。

53年度においては、上記の点につきさらに研究をすすめ、また小児・成人尿路感染症の実態について、全国的規模の集計を行ない、その成績につき報告し、かつ尿路感染症の診断基準を設定した。本年度(54年度)は、統計的観察の集計をさらにすすめ、かつ、従来より報告された成績を基盤として・小児尿路感染症の設定を研究目的とした。